

位置と環境

本遺跡は、鹿児島市川上町字加栗山、精木川の右岸の沖積低地に南に張り出した標高約170mの舌状のシラス台地に位置し、台地の基部を除く周辺は比高差約60mの急峻な崖となる。

調査の経緯

発掘調査は、九州縦貫自動車道建設に伴い、昭和50年（1975）～昭和51年（1976）にかけて県教育委員会が実施した。調査面積は、約1万㎡である。調査の結果、中世山城、縄文時代早期・後期、旧石器時代の複合遺跡である。

遺構と遺物

中世山城は、舌状台地の地形を利用したものである。西側と南側はシラスが浸蝕され急峻な地形となり、東側はやや緩やかで、北側台地の基部は「野首」の小字名で狭くなる。3つの曲輪で構成された15～16世紀の川上氏に関わる山城である。上部平坦地にある2つの曲輪は、台地中央部に柵列を伴う空堀で2分され、掘立柱建物跡や土塁、炉などの遺構と、一段低い北側の曲輪には空堀が構築されている。出土遺物には、土師器、染付の碗・皿、羽釜等がある。

縄文時代には、薩摩火山灰層（約11,500年前）を掘り込んだ竪穴住居跡をはじめ、集石や土坑が発見され、早期前葉の集落が立地していた。なお、縄文時代の遺物包含層は中世山城期に一部攪乱を受けていたが、アカホヤ層（鬼界カルデラ噴火による約6,400年前の火砕流）の火山灰層と薩摩火山灰層に挟まれて、良好な状態で保存されていた。

遺構には、竪穴住居跡17軒をはじめ、土坑78基（連穴土坑33基、土坑45基）、集石17基が発見された。竪穴住居跡は、台地中央部の南東縁を中心に、南西部に開口をもって半円形状に分布している。住居の平面形は、X V号住居を除き、隅丸方形を呈している。規模は縦1.9m×横1.6m、床面積3㎡の小型のV号住居跡から、縦5.1m×横2.8m、床面積14.3㎡の最大規模のⅦ号住居跡があり、住居の平均的な面



第1図 加栗山遺跡の位置

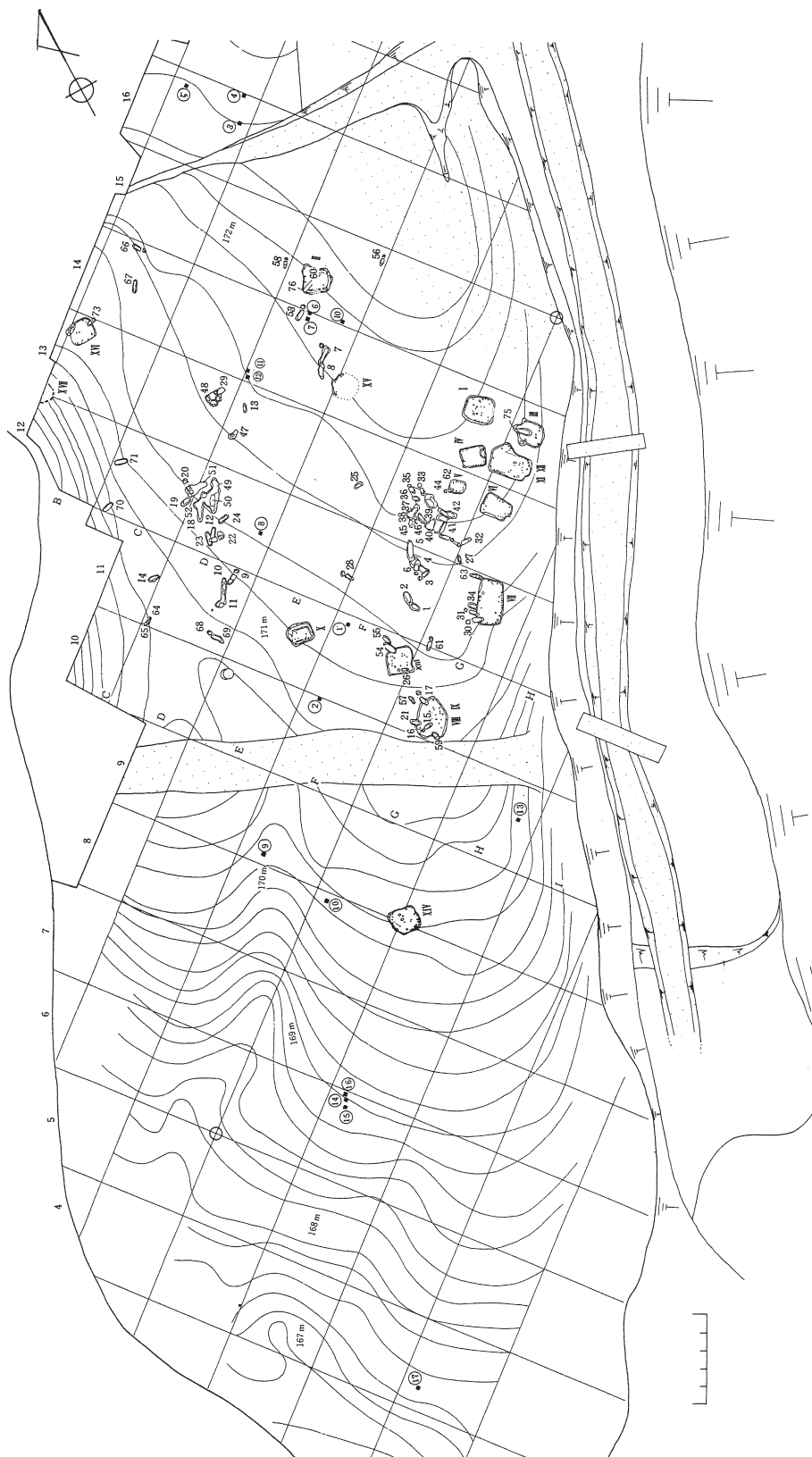
積は8.5㎡である。また、住居の内部構造は、それぞれの住居によって特徴があり、柱穴や壁柱穴、溝、壁帯溝を設けているが、全体的に柱穴は小さく浅いものである。炉は確認できなかった。なお、X号住居跡の床面のほぼ中央部には焼土の痕跡が認められた。また、Ⅷ号住居跡とⅨ号住居跡、X I号住居跡とX II号住居跡は重複し、II号・Ⅲ号・V号・Ⅶ号・Ⅷ号・Ⅸ号・X III号・X VI号住居跡は連穴土坑と重複する。

I号～X V号住居跡、X VII号住居跡は縄文早期前葉の前平・吉田期に比定される。なお、住居跡の分布や位置関係、住居の形態、出土土器の分布状況等からX VI号住居跡はこれらの住居より若干後続する石坂期の住居と思われる。

連穴土坑及び土坑は、住居跡に囲まれるように台地中央部に集中するが、これらは単独で発見されるものは少なく、大半は土坑や住居跡と重複している。連穴土坑は2つの穴がトンネルによって連なるもので、近年、縄文草創期（梶ノ原遺跡-煙道付炉穴）や早期（上野原遺跡）の遺跡での発見例が増えつつある。用途は集石遺構もあわせて調理施設として想定されている。

なお、竪穴住居間の重複や土坑との重複、土坑間の重複などから、これら遺構は同時に集落を構成していたものではなく、長期間、当地で生活が営まれていたことが想定される。

出土遺物は、縄文時代早期前葉の南九州特有の貝殻文土器の円筒土器、角筒土器の前平・吉田式土器を主体とする。器面は貝殻復縁で整形、胴部の文様



第2図 縄文時代早期遺構配置図

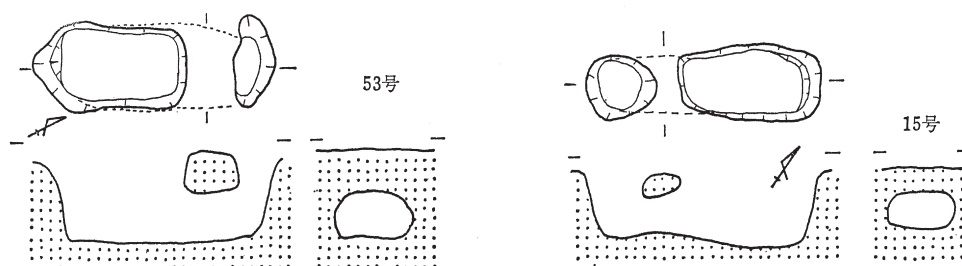
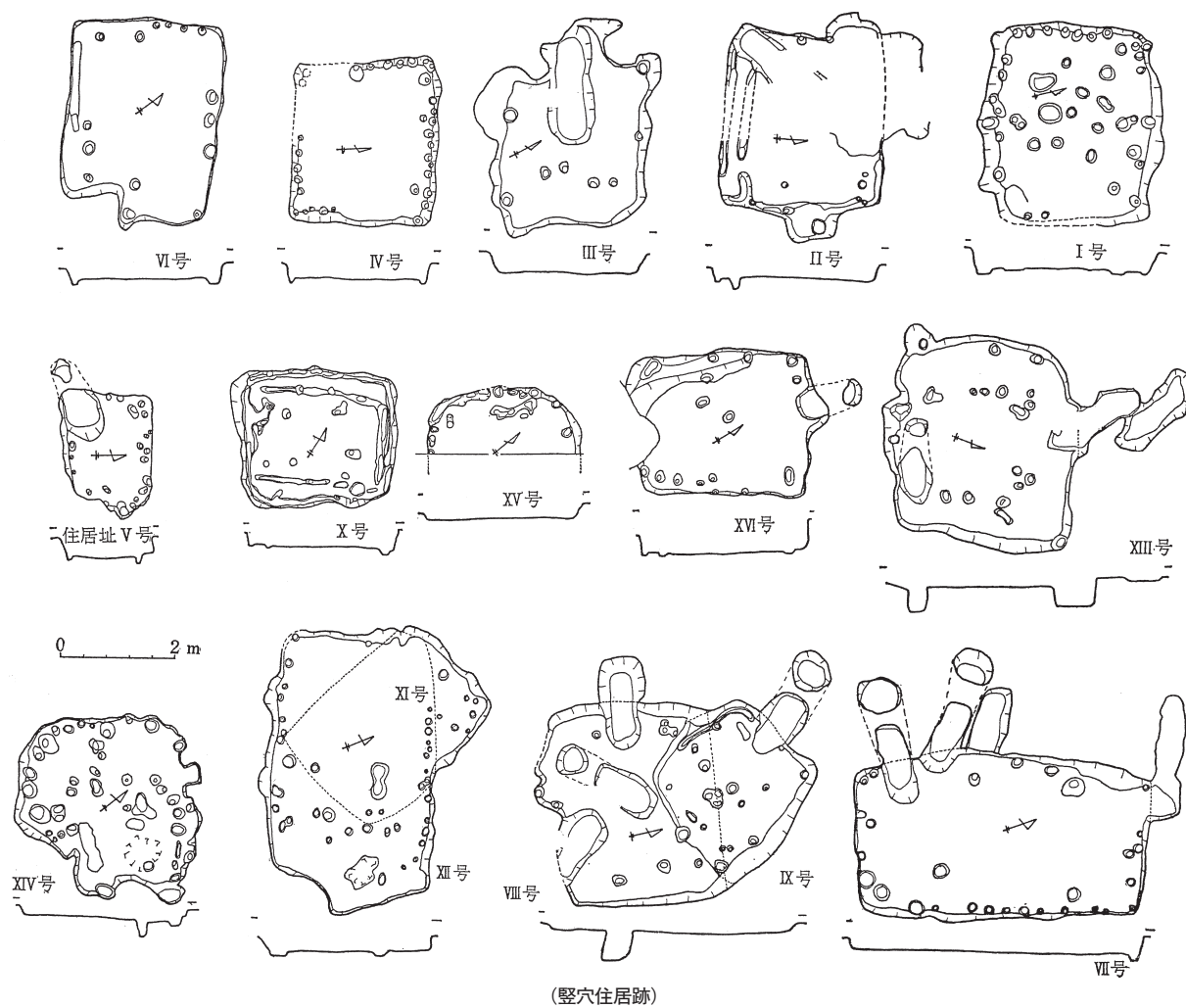
には貝殻復縁による縦位及び幾何学文、口縁部には5～6条の貝殻復縁の横線文を廻らし、さらに、小さな楔型の文様を貼付し、口唇部にはきざみ目文を施文する。また、比較的大型の土器で器壁は厚く、口縁部は僅かに外反し山形口縁で胴部はほぼ円筒形で平底で、器面は貝殻条痕文を施し、頸部から口縁にかけて貝殻復縁による斜位の刺突文と口唇部キザミ目を施す石坂式土器がある。その他、VI号住居跡からは頁岩製のペンダント、XVI号住居跡からは軽石製陰陽石が出土した。

旧石器時代の遺物は薩摩火山灰層（約11,500年前）の下層、約8,000㎡の範囲に大小38のブロックに分かれて8万点にもおよぶ細石器、細石核、スクレイパーをはじめ、局部磨製石斧1点と石鏃13点、大型台形様石皿などが出土した。

特徴

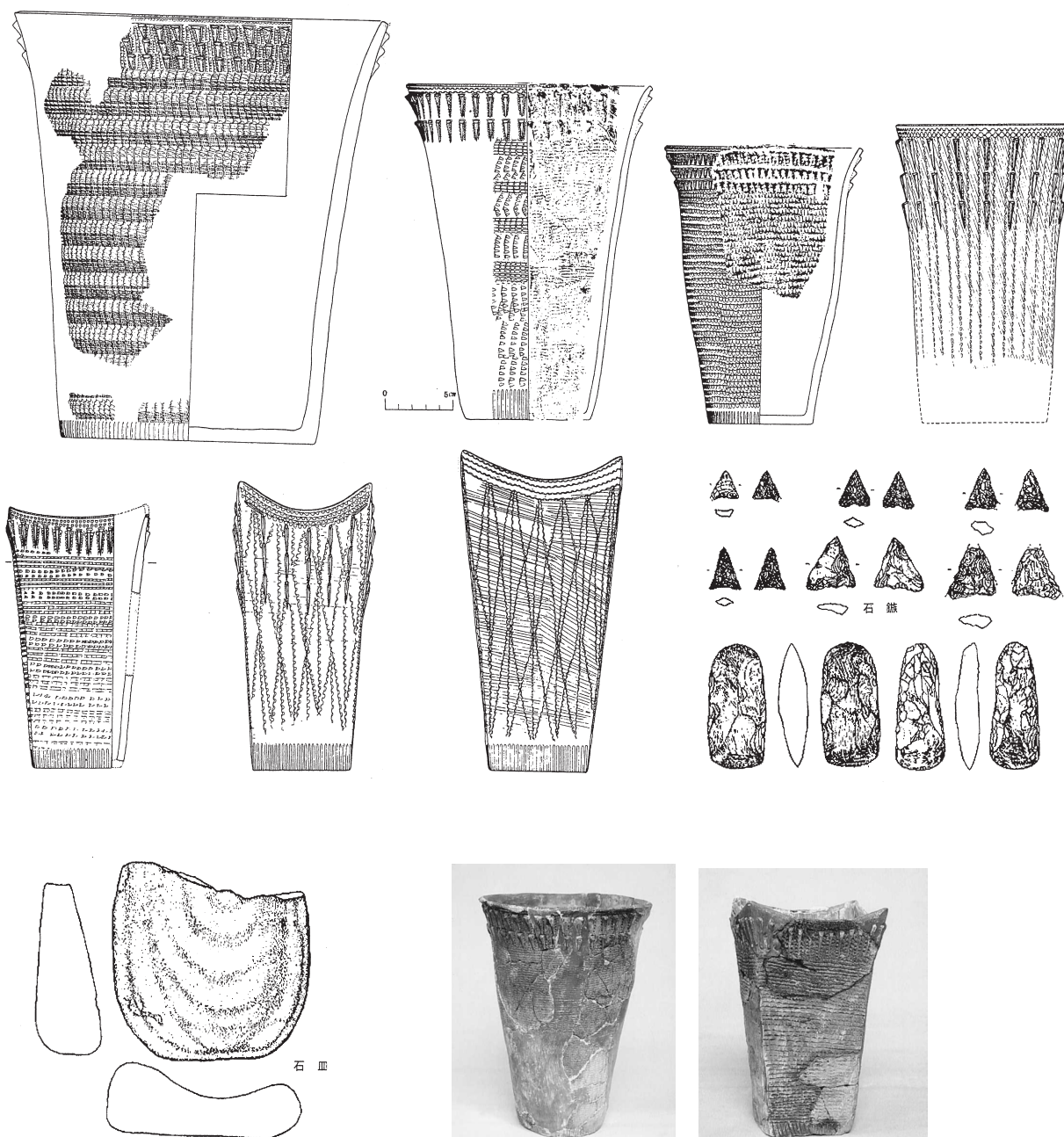
加栗山遺跡は縄文早期前葉の定住の先駆けとなる集落跡である。あわせて旧石器時代についても縄文への過渡的様相を示す資料となった。また、地質学的なアプローチによるアカホヤ層・薩摩火山灰層の存在とこれら火

写真1 縄文時代早期の遺構群



第3図 竪穴住居跡と連穴土坑

0 1 m



第4図 出土遺物

写真2 出土遺物

山灰と遺物の関係，土壌分析，フローテーション，保存科学による遺構の取り上げを導入するなど，今日の総合的な発掘調査の草分け的な存在でもある。

遺跡の現状は昭和52年11月の九州縦貫道開通によりすでに遺跡が立地する台地はその面影もなく道路から西側を見上げる一部に遺跡を残すのみである。

資料の所在

出土遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターに保

管され，一部は鹿児島県上野原縄文の森に展示されている。

参考文献

鹿児島県教育委員会1990「加栗山遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』16

(青崎和憲)